

私たちは、自閉症という障害をもつ人たちが、彼らなりに社会の一員として自主自立をめざし、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いていくことを目的としています。

A J U 檜の里

令和4年2月22日 発行 / 第106号

発行人 **A J U**
東海身体障害者団体定期刊行物協会
名古屋市中区丸之内3-6-43 みこころセンター4F

編集 社会福祉法人 **檜の里**
〒510-1326 三重県三重郡菟野町杉谷 1573
電話 (059) 394 - 1595
編集責任者 山田 勉
購読料 1部 100円
(会員の購読料は会費に含まれています)

新年にエールをこめて ～ワークセンターひのきの書初め～



上手に書けたよ



みごとな筆さばき



真剣な顔つきで…

私たちは、自閉症という障害をもつ人たちが、彼らなりに社会の一員として自主自立をめざし、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いていくことを目的としています。



「あさけ学園によせて」

社会福祉法人光風会
特別養護老人ホームアイリス

施設長 田中 由香里

このようにみんなが耐えることも経験するなど、地域での当たり前の暮らしをしてもらえます。

必要になって施設に住み替え、そこでの暮らしを利用者さんそれぞれに作っていく私たち高齢者施設で働く者にとっての先達であると確信しました。だからこそ、このご縁が何より代えがたい宝になりました。

これは、「庭先にある一本の寒梅が、厳しい風雨を笑って耐え忍び咲いている。他者と争うことなく、また力むこともなく、それでいてあらゆる花のさきがけとなって咲いている」という意味で、この謙虚さや強さをたたえ、人としてこのようにありたいと願った意味だと言われています。

庭上の一寒梅
笑って風雪を侵して開く
争わずまた力めず
自ずから百花の魁を占む

「寒梅」

必要になって施設に住み替え、そこでの暮らしを利用者さんそれぞれに作っていく私たち高齢者施設で働く者にとっての先達であると確信しました。だからこそ、このご縁が何より代えがたい宝になりました。

必要になって施設に住み替え、そこでの暮らしを利用者さんそれぞれに作っていく私たち高齢者施設で働く者にとっての先達であると確信しました。だからこそ、このご縁が何より代えがたい宝になりました。



私とあさけ学園との出会いは、通所授産施設の職員だった三十年近く前にさかのぼります。

それは、あさけ学園に住替えた利用者の皆さんが、菟野町での新しい暮らしを作り、生き生きと日々を過ごしておられたことでした。

必要になって施設に住み替え、そこでの暮らしを利用者さんそれぞれに作っていく私たち高齢者施設で働く者にとっての先達であると確信しました。だからこそ、このご縁が何より代えがたい宝になりました。

必要になって施設に住み替え、そこでの暮らしを利用者さんそれぞれに作っていく私たち高齢者施設で働く者にとっての先達であると確信しました。だからこそ、このご縁が何より代えがたい宝になりました。

力作揃いの書



「まちがいさがし」

新聞に掲載される間違い探しを楽しみにし、あっという間に間違いを探していく。新しい1年。息子なりの楽しみを一つずつ探し、幸せをつかんでいこう

「日の出」

書き易い、明るい

「のんびりゆったり」

穏やかな人になってほしいです

「すばらしい」

仕事を頑張りたい

「おにくだいすき」

お肉が好きだから毎日食べたいので、皆の注意されたことをよく聞いて、いい子になる

「無病息災」

健康な1年でありますように

「羽ばたく」

コロナ禍から解放されたいもありますが、本人が今より少しでも成長してほしいと思うから

「元気」

健康に過ごしていけるように



「自立」

将来に向けて身に付けるため

「がんばる」

本人がよく口にする言葉であるし、親が本人に望む言葉

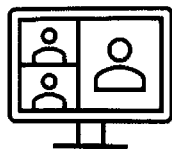
「自信」

時々なくなる自信。常に持っていて欲しい

「よろこび」

コロナ禍と言われる時代。少しでも明るい方向に向かってほしい





滋賀WEB大会

第34回 全日本自閉症支援者協会研究大会

『自閉症の人の生涯を支える“地域”を創る。』

本来、本大会は令和二年に開催の予定でしたが、コロナ禍のため一年遅れで、しかも大勢の人が集まるシンポジウム形式は避け、令和三年十二月八、九日の両日WEB利用のZoom形式で開催されました。

開催担当は「全日本自閉症支援者協会」近畿ブロックの加盟の十施設で主管施設は社会福祉法人しが夢翔会「ステップ広場ガル」でした。

また、大会テーマは『自閉症の人の生涯を支える“地域”を創る』でした。

大会第一日は午後一時より開会式があり、主催者挨拶、来賓挨拶がありました。

続いて午後一時四十五分より「発達障害のある人が感じる世界」と題した基調講演で開始されました。

最初にNPO法人DDAC（発達障害をもつ大人の会）の代表で当事者でもある広野ゆい氏から発達障害のある人の感じ方について詳細な説明があり、興味深く聞きました。

続いて愛知県医療療育総合センター副センター長の吉川徹氏から医師の立場からの説明がありました。

休憩を挟み質疑応答があり第一日は終了しました。

二日目午前はシンポジウム「縦の連携・生涯を支える」と題して①厚生労働省発達障害対策専門官 加藤永歳氏 ②文部科学省特別支援教育調査官 加藤典子氏より行政説明がありました。

休憩をはさみ日本自閉症協会副会長石井啓氏の司会で質疑応答がありました。

午後の分科会は、第一分科会「行動障害の支援」

第二分科会「横の連携・地域で支える」

第三分科会「感染症や災害に関する利用者支援と施設運営」と

いうテーマで発表・討議がありました。

私は第三分科会をZoomで見ました。発題として

①風水害報告 けやきの郷

初雁の家施設長 水野努氏

②地震災害報告 三気の会部長 松本慎太郎氏

③新型コロナウイルス感染症報告 なにわの里 ライフサポートなにわ管理者 漆島真一氏の報告がありました。

①のけやきの郷は前回大会の主管施設であり、その大会開催中も避難所生活が続いていたわけで、その大変さを感じられる発表でした。

休憩を挟んで基調講演及び発

支援と連帯の輪

94



題の助言「災害や感染から命を守ることを考える」と題して同志社大学社会学部教授 立木茂雄氏の講演があり、特に防災には「脅威を理解する力、事前に備える力、とつさに行動する力」が必要だとの指摘が印象的でした。

最後に質疑応答があり大会は終了しました。

(理事長 山田 勉)

令和四年がスタートして一週間、テレビは新型コロナウイルスが第六波に突入したと報じました。コロナ流行は三年目に入るのでウイルスは変異しながら衰える心配がありません。

せっかくこの年末年始、三重県は感染者数0が続く一先ずほっとしていたのに、引き続き大変な一年になるのかと暗い気持ちにさせられます。

学園の利用者は二回のワクチン接種を終え、昨日の会議で三回目の追加接種をきめた所です。インフルエンザの予防接種は去年の十一月三十日に行い、二回目は来月二月三日の予定です。

不思議といえば、昨年同様この年末年始もインフルエンザの

利用者の健康問題

43

あさけ診療所所長 小西眞行

学園の職員と協力して、必要時に他科受診をしています。間もなく花粉症の治療も始まりま

す。挑戦させましょう。それがこの子を成長させるのです。

さて話は変わりますが、自閉症にはこだわりがみられます。彼らは変化には弱く不安となり混乱します。そこで同じことのく

とところで、外来には強迫症の子たちも受診しています。この強迫症は「こだわり」といいますが、こちらは苦痛を伴う点で自閉症のとは一先ず別物かと思われま

す。その程度も軽いと思われま

り返し、すなわち同一性の保持で安心を得ようとするのです。お母さんの質問で「現状維持か新しい変化か」というのがあります。わたしは思い切って新しい経験をさせましようと思言します。現状維持は安心ですが進歩・発展が望めません。大変かもしれないが、周りにもサポートしてもらい新しい経験に

ある小学生は洗淨強迫があり、冬でも手洗いがやめられず、両手がカサカサにひかれています。また別の子は、確認強迫のため、何度も玄関のカギを確認します。確かめて安心しようとするのですが切りがありません。三番目のピットリ

系は納得のいくまでノート

の字を書き直すので紙が破れてしまっています。

強迫観念（不安）がたえられず、この不安を和らげようとして強迫行為に走ってしまっている。治療は不安を和らげる抗不安薬と強迫行為を阻止する認知行動療法の組み合わせですが、ここではそれを説明する紙幅が足りていません。

（この治療については幻冬舎新書「強迫症を治す」で分かりやすく説明されています。診療所の図書にあります。）

「第三者委員」

「第三者委員」は、福祉サービス提供に関する苦情に対し、円滑・円満に解決し福祉サービス事業の信頼性や適正性を確保することを目的として、三重郡三町社会福祉協議会、三重郡老人福祉施設組合みずほ寮及び当法人（平成二十五年度加入）で共同設置しています。

当法人は、今年度から二年間、設置運営の事務局を担当します。

年二回の定例会では、第三者委員及び各事業所担当者が集い、各々の苦情を報告し、意見交換並びに第三者委員の助言を受けています。（事務局長 永久雅晴）

「寄付ありがとうございます」
「ごいしました」

紙上を借りて厚くお礼を申し上げます（敬称略）

【物品】
▽井村屋株式会社



学園だより

令和四年一月七日、ワークセンターひのきで書初めを行いました。

前日の作業後から、机や椅子などをみんなで準備しました。みんなといっつも、通いの利用者さんだけです。

この約二年間、新型コロナウイルス感染症防止のため、グループホームの利用者さんとの通いの利用者さんは場所を分けて作業をしています。この日は通いの利用者さんが書初めを行いました。毎日作業している場所です。

書初め？と思うかもしれませんが、毎年恒例の行事、というわけではないのですが、昨年も行ったので戸惑う人はいません。何となくイメージができてくるのかもしれない。

今日の服装もまちまちです。昨年末にお知らせを配布、みんなにも話をしました。書初めを行う事と当日は作業やいつもの運動の時間はないことを説明しています。万が一のため汚れてもいい服装で、と伝えました。いつもの服装で出勤し

て作業に着替える人、休日のような普段着で出勤してそのまま参加する人、作業着を準備していたけれど、ほかの人の服装を見て着替えなかった人もいます。休日の服装に上着だけ作業用を着た人もいました。

さていよいよ書初めです。十二人が三つのグループに分かれて行いました。内容は家族で話をしてもらい決めました。本人の好きなもの、家族から利用者さんへのエール、今年の抱負などです。どれをとっても各利用者さんへの温かい思いがわかります。一緒に書く私たちも、そんな思いを感じながら心して取り組み

ました。一人ずつ何枚か練習しながら行うので、その間は順番に待っています。ほかの仲間が書いているのをじっと見る人、ちらちらと見ている人、自分の番を緊張して待っている人いろいろです。

何年か前、初めて書初めをした時もそうでしたが、丁寧に、いいものを書こう、書きたいな、という思いがすごく伝わります。これはみんなそうなんです。一人では書字が難しい人も、そうではない人も変わりません。筆を大切に扱ったり、書いた後は汚れないようにそっと動きます。一緒に取り組んでいると普段の作業とはま

違った感覚です。今年も十二枚の力作が出来上がりました。掛け軸にするような大きな半紙に書いたことや、みんなで絵の具なども使って素敵な和紙に書いたこともありまし

いんちきは



利用者Aさんの成年後見でお世話になっている、いなべ日常生活自立支援センターの



いなべ日常生活自立支援センター 小森勝徳センター長
法人後見支援員 近藤博文さん

小森勝徳センター長、法人後見支援員の近藤博文さんにお話を伺いました。お二人には三カ月に一回のペースで来園、面接を受けています。

Aさんとの面接は、担当職員から現況を聞き取った後、本人と会うのが常ですが、当初Aさんは室内をキョロキョロするだけで、座るなり立ち上がってしまう状態だったとお聞きました。握手しても目は合わず、黙ったままでしたが、次第に「こんにちわ」と挨拶したり、質問にも答えてくれるようになってきたそうです。

最近では、Aさんに向かって

て通路の先から手を上げた

ら、Aさんも手を上げて応じてくれたと、うれしそうに話してもらいました。

あさけ学園の支援内容について尋ねたところ、担当職員が替わっても一貫して細やかな支援が担保されており、このまま継続してもらおうのがベストという評価を頂戴しました。

加えて、早くコロナ禍が終息し、また対面でゆったりと話のできるようになる日が楽しみですとのことでした。

今後ともよろしくお願いいたします。

(施設長 近藤裕彦)

全国及び三重県下全県で新型コロナウイルスの拡大が懸念される中、私ども就労移行支援事業所「希望の集ひなが」の職員四名の研修の依頼を快



左から 稲田さん・鈴木さん・今井さん・伊藤さん

く受け入れて頂いた施設長の近藤様その他スタッフの皆様にあさけ学園の研修を依頼して頂き、誠にありがとうございました。研修の依頼を頂いた稲田さん、鈴木さん、今井さん、伊藤さん、お忙しい中、研修の依頼を頂き、誠にありがとうございました。研修の依頼を頂いた稲田さん、鈴木さん、今井さん、伊藤さん、お忙しい中、研修の依頼を頂き、誠にありがとうございました。

研修の依頼を頂いた稲田さん、鈴木さん、今井さん、伊藤さん、お忙しい中、研修の依頼を頂き、誠にありがとうございました。研修の依頼を頂いた稲田さん、鈴木さん、今井さん、伊藤さん、お忙しい中、研修の依頼を頂き、誠にありがとうございました。

研修の依頼を頂いた稲田さん、鈴木さん、今井さん、伊藤さん、お忙しい中、研修の依頼を頂き、誠にありがとうございました。研修の依頼を頂いた稲田さん、鈴木さん、今井さん、伊藤さん、お忙しい中、研修の依頼を頂き、誠にありがとうございました。

あさけ学園での研修を終えて

就労移行支援事業所「希望の集ひなが」

稲田和之 鈴木身知 今井有美 伊藤あかね

編集後記

「ムリですー」いつもは諦めようとは思えない彼も笑うしかなかった。一目見れば分かる。一面銀色に盛り上がった中庭は外出を諦めさせるには十分過ぎるほどの説得力を持っていた。「また今度」「まだダメ」と先の見えないやり取りにそんな力は無いはずなのに曖昧な話を受け入れて、真っすぐ

前を向き続けているエネルギーには「支えられているなあ」と本当に日々頭が下がる思いだ。ずーっと出来なかった我慢する事も自然と身に付いた。努力は報われるはずと「頑張れガンバレ」でやってきた。雪解けは近いはず。それぞれが大きな希望を抱いて描くその先の景色。揃って迎ええられる春が待ち遠しくなりません。

(支援員 池田健一郎)